

～起生期の生育状況に応じて追肥を実施しましょう～

1 融雪水の排除およびほ場周囲の融雪促進について

融雪が遅れそうな場合は、融雪材の再散布により、できるだけ速やかにほ場を出させましょう。融雪後、滞水している箇所では株の枯死や雑草が繁茂しやすくなります。溝切りや額縁明渠等により、速やかに排水しましょう。

ほ場周囲や取付け部では、融雪が進みづらいですので、融雪剤の追加散布や「雪割り」により、できるだけ速やかに融雪させましょう。

2 起生期以降の追肥について

本年の起生期の茎数は、越冬前まで高温で推移したことや根雪までの期間が長かったことから、多いことが予想されます。

追肥を行うタイミングによって生育に対する効果が変わりますので、肥料が効てくる時期も考慮して、追肥を実施しましょう。

①起生期(4月中旬頃まで)の追肥

越冬後の生育回復とともに、茎数を増加させる効果が高い時期です。茎数が多いほ場では、過繁茂となるおそれがあるため、表1を目安に追肥量を調整しましょう。

表1 起生期の茎数と追肥量の目安

起生期茎数	500本/m ² 以下	500～1,500本/m ²	1,500本/m ² 以上
窒素成分量	6～8kg/10a	4～6kg/10a	2kg/10a程度
(硫安の場合)	(30～40kg/10a)	(20～30kg/10a)	(10kg/10a程度)

なお、追肥量を減らした場合は、肥料切れにより葉色の低下が早まる可能性がありますので、次回の追肥を早める等の対応が必要となる場合があります。

②融雪の遅れ等により、追肥が遅れた場合(4月下旬以降)

「肥料切れ」により、葉色が淡くなったり、ほ場が乾燥している場合は、肥料が効くまでに時間を要するおそれがあります。

幼穂形成期(5月中旬頃)に近いことから、肥料を速やかに効かせる必要があるため、降雨直前をねらって追肥するか、即効性肥料(ポイントショット等)の利用もご検討ください。追肥量は、起生期の標準量(窒素成分で6kg/10a)とします。

【茎数の数え方】

○生育中庸な地点の1畦50cm間の茎数（2～3箇所）を数える

$$\text{m}^2\text{当たり茎数} = 50\text{cm間の茎数} \div \text{畦幅(m)} \div 0.5(\text{m})$$

例) 畦幅12.5cm、50cm間の茎数72本の場合

$$72\text{本} \div 0.125\text{m} \div 0.5\text{m} = 1,152\text{本/m}^2$$

3 除草剤について

①イネ科雑草

スズメノカタビラおよびヒエ等、イネ科雑草に対して、「トレファノサイド乳剤」の登録が拡大され、越冬後からの散布が可能となりました。

ただし、土壌処理効果のため、雑草発生後は効果がありませんので、4月中をめどに、なるべく早期の散布を行ってください。

表2 「トレファノサイド乳剤」の越冬後の使用方法（登録内容は4月2日現在）

薬剤名	使用時期	10a 当り使用量	散布水量	使用回数
トレファノサイド乳剤	生育期 (雑草発生前) 収穫45日前まで	200～300ml	100ℓ	2回※

※越冬前に「ガレス乳剤」を散布している場合は、「トレファノサイド乳剤」の使用回数は1回のみとなります（両薬剤に共通して含まれる成分「トリフルラリン」の使用回数が2回以内のため）。

②広葉雑草

雑草の生育が進むと除草剤の効果が低下します。また、散布時の天候条件によって効果の低下や薬害が発生する場合があります。

それぞれの除草剤の使用時期を遵守し、適切に処理して下さい。

表3 広葉雑草に対する除草剤例（登録内容は4月2日現在）

除草剤名	対象雑草	使用時期	10a 使用量	回数
エコパートフロアブル	シロザ タデ類 ハコベ	春期(雑草発生始) (止葉抽出前まで) (収穫45日前まで)	50～75ml	2
MCP ソーダ塩	シロザ	小麦の幼穂形成期 (収穫45日前まで)	200～300g	1
バサグラン液剤	タデ類 ハコベ		100～150ml	1
ハーモニー75DF	ナズナ スカシタゴボウ		7.5～10g	1

【注意事項】・エコパートフロアブル：薬害が出やすいため、展着剤は加用しない。

・MCP ソーダ塩：好天日（20℃以上）に散布する。

・バサグラン液剤：好天の続く時期に散布する。

・ハーモニー75DF：使用後は器具類を専用の洗浄剤で洗う。

